ISSN 1344-5715

Bulletin of Tokyo Kasei Gakun University Library

東京家政学院大学 図書館報

平成23年3月8日　第57号

発行者　東京家政学院大学
附属図書館
〒194-0292 東京都町田市
相原町2600
電　話　042(782)9815
印刷所　(株)栄文舎印刷所

大江記念 三番町図書館について

田中 清章

先日"非常に驚いた"ことがあった。今までの常識が通じず、考えもしないような勉強法について、あるテレビ番組で紹介され、強烈に記憶に残ったことを紹介したい。このことは、後述する大江記念三番町図書館にも通じるので最初に述べたいと思う。

それは、勉強に対する環境と条件に関するもので、我々の常識が如何に曖昧なものかが把握できる。その第一は、「暗記するためには、蛍光ペンを使ってはならない」こと。第二は「一夜漬けの効果を最大限発揮するためには、先に仮眠をとる」こと。第三は、「勉強に集中するためには、適度な雑音が必要である」ことである。この三つについて、複数の男女・若者を被験者として実験を複数回実施し、最後に小テストを行う実証研究報告である。

第一は、「暗記と蛍光ペンの関係」について探ったものである。蛍光ペンでラインを引くことは後の復習や整理には役だったとしても、暗記にはむしろマイナス要因となること。すなわち、重要事項や語句に整理してラインを引いたことで、暗記したつもりが逆に覚えていないことが多くあることが確認されたことである。

第二は、我々が生徒や学生時代によく行った「一夜漬けの効果」についてである。すなわち、「徹夜」「後で仮眠」「先に仮眠」のうち、どの方法が最も効果的かを探ったものである。これには前提条件があり、被験者のうち事前テストで最高点をとった者(最優秀者)が徹夜、次点が後で仮眠、最も悪い点数をとった者が先に仮眠という条件下で実施されたものである。ここでは、徹夜グループが資料に接している時間が長いので最も効果的と考えがちであるが、先に仮眠して体調を整え、翌朝のテストの直前の条件で受験することが最もその効果を発揮できることを示したものである。

第三は、勉強に集中できる環境はどこかを探ったものである。すなわち、自室・リビング・ファミレス及び図書館のうち、どの場所が最も勉強に適しているかを実験によって証明したものである。一般常識では、自室や図書館のように静かな雰囲気と環境が整えられた場所が最高・最適の条件であるという考え方が主流であることは言うまでもない。一方、最近マスコミで取り上げられ脚光を浴びているリビングもまたある意味でその効果について驚かされた場所でもある。しかし、小テストの結果を見ると明らかにどの被験者においても、集中して勉強できる場所は雑音の多いファミレスであった。このことは、勉強は静かな場所が最適という我々の常識は大きく覆されたことを示し、それを許容し認識する広い知識や考え方が必要であることを痛切に感じる。

それでは、本題に入ることとする。本学は、平成22年度改組で家政学部と人文学部及び短期大学を統合し、「家政学」を学問及び教育の中心領域としてとらえた「現代生活学部」が新しく船出し、23年度で二年目となる。現代生活学部は、町田キャンパスに生活デザイン学科、児童学科、人間福祉学科の3学科、千代田三番町キャンパスに現代家政学科、健康栄養学科の2学科の1学部5学科体制で、町田と千代田三番町の2キャンパス制の教育体制で運営される。そして、平成23年4月に47年前の昭和39年に竣工した1号館の耐震及び改装工事が完了し、新学期よ

第五十七号　目次

大江記念 三番町図書館について　田中 清章
Le Paulownia en fleurs 花桐 HAIKU　小島 俊明
大江文庫がかたる持続可能な社会　上村 協子　関原 暁子
定年退職を迎えて　中村アツコ
韓国の食　冨永 芳枝
挑戦と経験　田 雨　張 偉霞
図書館のミニチュア展示について　野口 豊隆
寄贈著書紹介
資料の紹介　新版 技術文章のまとめ方　白井 篤

資料の紹介

新版　技術文章のまとめ方 上・下

山中 秀男 著

白井　篤

東洋経済新報社

ここ数年来、学生の基礎学力の低下は目を覆うばかりである。特に、文章表現能力の低下は、テストの答案やレポートなどを見ても顕著である。文章が書けないから、インターネットの内容のコピー・アンド・ペーストや、書籍・雑誌の丸写し術が氾濫している。

私も学生時代、研究論文やレポートなどを正しい日本語で書くことができなかったため、卒業研究の指導教授から読むように言われたのが、標記の本である。上下２巻に分かれており、上巻は「基礎編」で、特定の文書を作成する以前に、誰もが一応身につけておくべき基本的な一般事項が体系的に収録されている。下巻は「応用編」で、技術論文、報告書、議事録、特許出願書類などのまとめ方の概要が収められている。「書くことの重要性」から始まって、「文章作成の基本」、「文章をまとめる要領」、「用字、用語の使い分け」と続く。本のタイトル「技術文書……」から想像するほど読みにくい本ではない。「から」と「より」の使い分け方、接続詞（「および」、「ならびに」、「または」、「あるいは」、「かつ」など）の用い方などは、現在でも読み返して確認している。以前は、理工系の大学の授業に「テクニカル・ライティング（technical writing）」という科目があり、その参考図書の一つとしても挙げられていた本である。「テクニカル・ライティング」とは、研究論文、レポート、議事録、企画書、その他の文章において、科学・技術に関わる文章を正しく、効果的に書く技術をいう。英語で言うと、難しそうに聞こえるが、テクニカル・ライティングで示されている科学・技術文章のコンセプトとは、和文・英文を問わず、次の三つの要素からなる。

- 正確な（correct）
- 明確な（clear）
- 簡潔な（concise）

これらのコンセプトに基づいて、実際にテクニカル・ライティングの基本的なルールを次に解説する。

- 記述の順序をよく考えて、論旨の一貫性があるように、文章を書く。
- 正確な情報を用いて、誤字・脱字のない正確な文章を書く。
- 主語と述語の関係及び修飾語と被修飾語の関係をはっきり意識して、口語体で明確な文章を書く。
- 分かりやすい簡潔な表現を目指して、短い文章（短文）を書く。
- 「常用漢字表」、「現代仮名遣い」、「送り仮名のつけ方」及び「外来語の表記」による正しい日本語表記に従って、適切な学術用語を用いて文章を書く。
- 句読点も文字であるとの認識を持って、句読点を正しく打った文章を書く。
- 書き終わった文章を必ず（できれば声を出して）通読して、見直す。

卒業して社会にでると、職種にもよるが、仕事の約1/3は、文章を書くことで占められると言われている。勤続年数が増え、地位が高くなるにつれて、文章を書く割合も増えてくるだろう。紹介した書籍を参考にして、大学生のうちに正しい日本語が書けるようにしてほしい。コーヒーを何杯も飲まなくても読むことができるような、学生諸君のレポートを一枚でも多く読みたい。

最後に、紹介した書籍以外に、次の３冊を「建築・住宅・インテリア」の領域を学んでいる学生には、読んでほしい。

「井上書院」発行

- 「建築系学生のための卒業論文の書き方」
- 「建築系学生のための卒業設計の進め方」
- 「建築模型をつくろう」

図書館所蔵

（生活デザイン学科 教授）

り新しい学舎（まなびや）としての歴史と機能を果たすことになる。したがって、東京家政学院大学附属図書館においても新しい体制で管理運営されることになる。第一に、これまで慣れ親しんできた附属図書館の名称が代わることである。昨年度までの附属図書館本館・分室という愛称が、平成23年度から町田キャンパスの「大江記念図書館」及び千代田三番町キャンパスの「大江記念三番町図書館」という名称で運営されることになる。特に、大江記念三番町図書館は、リニュアルされた1号館地下1階に設けられ、開館当初は約5万冊の蔵書数が将来的には約7万冊の新しく大きな図書館として再生する。第二に、新しく導入された外部業者による管理体制による運営という新しい試みである。本来、図書館の最も重要な機能は、図書の研究・保管・貸出とレファレンス機能である。すなわち、私たちへの情報伝達媒体は図書であり、その中の文字や絵などが視覚情報として認識され我々の知識として蓄積される。また、レファレンス機能は、関わっている多くの人々との情報伝達機能が最も重要であり、再確認されるべきである。したがって、本学においてはこのような図書館システムのさらなる強化と拡充を目指して、入館・貸出・返却及び蔵書システムのデジタル化を積極的に採用し、また、学生と職員を含めた人と人とが図書や施設を媒体としてコミュニケーションを積極的に進めることを目的とした学生サービスの拡充を外部業者による新しい運営体制の中で図る。一方、前述した勉強に集中できる環境を図書館に導入、採用するためにはどのような方法かを探り、検討のため利用者の立場からの皆さんの多くの忌憚のない意見とよりよい運営のための手助けを切望している。

（附属図書館長）

本の周辺

Le Paulownia en fleurs
花桐　HAIKU

小島　俊明

なんという僥倖だろう！　友人のジャン・フランソワ・バザンに俳句をねだられて、一句を披露したのがきっかけとなり、フランス語句集のフランスでの出版が現実となろうとは！

ずっと現代詩を追求してきて、難解の袋小路に踏み込み、苦しんでいたとき、俳句が口をついて出ることをまま経験してはいたが、今から思うとそれが伏線となって、俳句という短詩型の世界へおのずと惹き込まれることになった。詠んでいると、ぼくなりのポエジーを、五七五の定型が開放してくれることが分かった。

師事した詩人ピエール・ジャン・ジューヴの言葉のように、詩は歌であり魂を浄化して高めるもの。自然や人事に分け入って、神秘に耳傾けることが肝要だと考えてきた。ふらんす堂から2007年に出した句集「花桐」は、ほぼその線でまとめることができた。

その句集からフランス人にも理解しやすい句を選んで三行詩にまとめ、次つぎとジャン・フランソワに見せ、新しい句も入れて三百句をこえたとき、クレア社から声が掛った。現代フランスを代表する詩人イヴ・ボンヌフオワから巻頭言をいただき、出版はとんとん拍子に運んだ。パソコンの発達のおかげで、日本語読者の便もはかり、仏文に日本語を付記し、2010年春、本が出た。

これが契機となって、９月にモナコの日本夏祭りに招かれ、俳句の国際化に一役貢献することができた。外国の人たちから、ローマ字以外に日本語のサインも求められ、嬉しい悲鳴をあげた。

また、フランスの著名な文芸批評家ジャン・ピエール・ジョシュア（国民文学大賞受賞者）やアラン・ヴィルコンドレから、喜ばしい賛辞が寄せられ、栞に載せることになった。

フランス語は、世界の教養人の解する国際語でもあるので、この句集は漸次、フランス以外の国の読者たちにも迎えられていけばよいが……というのも、現在世界の俳句人口が、日本を除いて50カ国200万を超えると言われているから。

（本学名誉教授）

※フランス図書 西新宿店　3,381円

大江文庫がかたる持続可能な社会
―生活文化伝承と大学における消費者教育―

上村　協子
関原　暁子

セミナーでの『江戸エコ行楽重』の展示

江戸時代は、循環型社会と言われる。東京家政学院大学附属図書館特別コレクション大江文庫は、江戸期に出版された料理書の板本の大半を所蔵しており、写本、巻物、錦絵などとあわせて、当時の庶民の食生活を研究する宝庫として知られている。〝初かつお売り〟の錦絵など大江文庫を見ていると、「江戸の食を実際に賞味してみたい。いかにエコだったのか、実験で実証した数字がしりたい。」など江戸のエコな食を研究してみたい意欲がムクムクと湧き上がってくるのではないだろうか。

東京家政学院大学が主催した、現代生活学セミナー「大学における消費者教育を考える」（２０１０年10月２日、千代田区秋葉原の富士ソフトプラザで開催）のセミナールーム４では、図書館と生活文化博物館の協力によって大江文庫『江戸エコ行楽重』関連資料が展示された。『江戸エコ行楽重』は、大江文庫研究を現代社会に活かした事例である。

本学名誉教授の江原絢子氏がメンバーである（財）国民公園協会皇居外苑と東京ガスのエコ・クッキングの協働プロジェクト「ＥＤＯ→ＥＣＯ　エコ・クッキングプロジェクト」が皇居外苑楠公レストハウスで開発し誕生した。元祖てんぷら京阪風すり身の揚げ物（『料理早指南』１８０１年）、おぼろ大根など江戸庶民の味が文献などを通じて再現されている。東京近郊の旬の味や地産地消の食材を使用し、調味料や調理法にもこだわり、千代田区の二重橋前のレストハウスで食べると、特別なハレの食事だった行楽弁当の雰囲気が伝わってくる。東京家政学院大学の学生が参加した、現代・江戸・エコ比較大実験結果が掲載された冊子が行楽重についてくる。

さて、日本の消費者教育は転換点にある。持続可能（サスティナブル）な生活を目指して舵を切る時期を迎えている。『国連　持続可能な発展のための教育の一〇年』でも、消費者教育は重要とされる。文部科学省では、現代生活学セミナー基調講演者である板東久美子生涯学習政策局長がリーダーシップを発揮して消費者教育を推進している。しかし、消費者教育といえば、悪質商法に騙されない方法を教えるイメージがつよく、意識変換が難しい。

本学は日本ではめずらしい消費者教育コースを設置した。現代生活学セミナーの担い手は学部２年生の消費者教育コース学生たちである。「家政学ができること、ひとをつなぐこと、ひとともとともひとをつなぐこと、時代の文化をつなぐこと」を掲げ、生産者（作り手）と消費者（使い手）の新しい関係の形成にむけて、生産消費者教育を提案して注目され、セミナーにも１６０名を超える参加者があった。

循環型社会　　冊子「ＥＤＯ→ＥＣＯ」から抜粋

大江文庫は、これまでもＮＨＫの国際放送、各テレビ局の身近な社会の形成には「環境」のみならず、「経済」、「社会」、「文化」４つの持続可能性を念頭におくこととされるが、キーワードは文化である。『大江文庫所蔵、錦絵等図版目録』をフィンランドや韓国の消費者教育の関係者に持参した時に、大変好評であり庶民の生活を注目し、生活文化を若者に伝承していることへの関心の高さを感じた。大江文庫の原本を見て、『江戸エコ行楽重』を味わうことは、実践的であり説得力をもっている。大江文庫がかたる生活文化の知を伝承し、食に限らず大学における消費者教育をつくっていきたい。過去・現在・未来を分断せず、現代の若い世代が江戸の庶民のくらしを、自分の日常生活と結び付けて考える機会をいかにつくるか課題だと考えられる。

２０１０年の春、東京家政学院大学が現代生活学部１学部として生まれ変わった。２０１１年の春には、２学科が学院発祥の地である、千代田三番町にもどる。原点に戻って、新しい歴史をつくる時期である。

（現代家政学科　教授）
（附属図書館事務部長）

番組に資料提供してきたが、学外にでることはほとんどなかった。東京家政学院大学が主催する学外セミナーで、キリンやＤＯＣＯＭＯや大江文庫が展示されるとは画期的である。

なぜ展示をしたのか。持続可能

定年退職を迎えて

中村　アツコ

昭和四三年四月、お茶の水女子大学時代の恩師林太郎教授（愛称・太郎先生）の助手として東京家政学院に職を得た。当時、一般教育系教員は、文系、理系ともに国立大学を定年退職した教授が多く、系会議では、教育の熱い議論がなされ、多くを学んだ。町田移転間もなく東工大を定年退職して隣室に移って来られた、物理学・高木ミエ先生との七年間は特に密度が濃かった。工作工房が建つ前、窓から、雉の訪れが見られ、学生も教員も少ない日々を、共に楽しんだ。組合便りにも書き送った。高木先生は系会議の議長をしながら、手書きの議事録を作成し、翌日には配付するという手際の良さ、合理的思考の先生であった。共に入試に関係し、推薦入試判定に成績追跡調査の結果を数値化した高校評定値信頼度の考え方を導入した。また、共に給食経営管理の羽田先生のもとで栄養管理の実際を学習し、共同研究の形で、食品学分野へと研究を進める足掛りとなった。その一つは、核磁気共鳴法による水分子の緩和時間測定に基づく「遠赤外線オーブン加熱ローストビーフの美味しさ」の証明である。

林・高木先生と卒業生と共に
昭和58年ＫＶＡ祭

昭和五九年に、相原仲町会から寄贈された桜並木は、見事に成長し、毎年、新入生を迎えて咲き誇り、三号棟食堂からの眺めは圧巻である。やがて、人文学部が開設されると、両学部有志が腕を揮い、手作りの品々で、桜並木での花見、セミナーハウスでの忘年会などで親睦を図った。天ぷらを得意とする書道の先生、ケーキの得意な国文学の先生、鯵のマリネと生春巻きの生化学の先生等々・・・・・。忙しすぎるのだろうか、昨今はそのような、気持ちの余裕も時間も無くなってしまったようだ。

食品学・森宏枝、栄養学・常松澪子両先生と私の３人は、ほぼ同時期に前後して、家政学院に就職したが、二人は定年前に退職してしまった。同年配、実験系の３人組として三十数年間を共にし、生き方の問題、学生達の様々な問題を忌憚なく論じ合った。生涯の友となるであろう。早世した物理の占部先生も良き友であった。最後に担任した学年の管栄国試では、新任の海野先生を初めとする諸先生との環境作り、学生同士の追い込みの自主勉強会に加え、神頼みが効を奏したか、全国七位（関東三位）の高合格率を記録し、安堵した。

六十年頃、共用機器室に設置された二台のパソコンでの「二太郎」による文書作りは、四十歳半ばの私には苦労であったが、その後の、パソコン室でのE-mail講習会は、さらに驚きだった。現在の様な状況になるなど全く想像すら出来なかったため、prunus（梅の学名）をアドレスとした。誰からのメールか解らないと苦情を言われているが、訳があって変更しない。

林先生と私　昭和43年

その訳とは、太郎先生と初代家政学科卒論生と共に始めた梅酒の研究である。太郎先生退職後、「梅酒の熟成」につき、図書館蔵書・本朝食鑑にある「青梅、砂糖、焼酎を瓶に入れ、二十日ほど冷暗所に保存」とある記述の科学的根拠を、卒論生との研究により、証明できたからである。二十日ほど後、酸に強い梅の転化酵素により砂糖はブドウ糖と果糖に転化していた。シアン成分も強酸に追われて無くなる。その後も梅酒は、香・色・味共に熟成する。単に、三種が混合するだけでなく、互いに作用し合って変化していくのである。この「成分間相互作用による変化・熟成」は人生の教訓でもある。卒論生数も約二百名に達した。

さて、新任の私の任務は管理栄養士専攻の化学実験担当であったから、以来、大笑い、微笑、苦笑、怒り、様々な思いを胸に、この三月で満四三年間の幕をおろす。当初の化学実験の内容は、化学理論理解と専門実験基礎のための十二項目であったが、数度のカリキュラム改革を経て、七項目になった。現行の健康栄養学科の化学基礎科目の配置・単位数共に、早急の検討が必要であると思う。この間に、家庭科教員資格を目指す学生にも、科学実験が必要であろうと、自然系教員が分担した「自然科学実験」を開講した。この科目は、全学的に選択できる、「体験で学ぶ自然科学」として新たに展開された。家政学部・人文学部の学生がほぼ半数ずつ履修し、マイクロメーターで、毛髪、シャープペンシル芯の太さ、アルミ箔の厚さを測って目を輝かせ、箔を構成するアルミ原子の層数の計算に頭を悩ませ、pHによる花色の七変化に感激する姿が見られた。学生の反応は、喜びであったが、残念ながら、私の退職を機に廃止されることになった。

近年は、生活科教育担当として、児童学科配属となり、それまでとは一味違った、発想豊かで、元気一杯の学生との交わりは、楽しく、異なる専門の教員との交流も新鮮で、幸せな四年間であった。

定年前に、この三月に退職なさる数学の細淵先生とは、一般教育系教員所属として出発し、家政と住居学科に別れ、この一年間を再び児童学科で共に過ごした。入試問題作成では、毎年、共に苦心したが、その苦行からも解放される。

長年に渡る、諸先生、職員の皆様、学生諸嬢のご厚情に感謝し、東京家政学院の発展を祈ります。

（児童学科　教授）

本の周辺

『韓国の食』

著／黄　慧性、石毛　直道
平凡社　2005年新版

冨永　芳枝

私がいつも持ち歩いている本「韓国の食」を取り挙げることにした。

過去、戦時下において日韓の間に生じた様々な問題は戦後もずっと引きずったまま今に至っていて何も解決されていない。その思いは私も釈然としない気持ちのまま胸の奥においてある。近年は韓国との文化交流も盛んとなり、特にテレビドラマの影響が大きく、私も５～６年前からいろいろなジャンルのドラマの内容を見て韓国の生活様式や習慣が似通っていると思う部分や全く日本と違う部分に気づかされて多いに興味を抱くことになった。食生活については特に関心事が多くあり、料理の素材の扱い方や作り方、献立の内容もドラマ中の食卓に配置された料理の種類と数で判断ができることが面白い。それについてもっと知りたくて食関連の詳しい内容が、判り易く見られ参考になり、手軽に持ち歩ける本のサイズを条件に探し求めた本がこの「韓国の食」である。この本は日韓の食文化研究者、黄慧性、石毛直道の二人の対談で構成され、著されている。主軸は韓国の宮廷料理について述べられている。特に興味をそそることは李朝、最後の王妃の食事作りを実体験し得た内容がふんだんに記述されていることにある。王妃や皇太子の食事は別々の厨房でつくることや料理内容・日常生活について語られていたり、下働きの男女の食事作りも厨房が別々である等が詳しく説明されている。日本の宮中の食事内容はあまり公にされずにいるので知る由もないのが残念である。本の内容は宮中だけに留まらず、庶民生活についても詳しい。各地方の郷土料理、食材の説明、現代の食事・韓国の食事作法についても語られている。食事作法は器は持ちあげてはいけないし、ご飯は匙で食べ、箸は煮物・焼物等の料理や汁の実を掴む時に使う。また食事の際には正座はせず、女性は片膝を立てて食べるのである。膝を立て食べることは日本では考えられないことであるが、韓国では正座は許しを乞う時にする姿勢であることから滅多なことで正座の姿はとらない。

近年は韓国も洋風化し地方の食卓もテーブルになり生活様式も段々に変化していくことであろう。本当に近い隣国であるが、まだまだ未知の文化が多々あると思う。この生活文化の違いの部分が研究してみたくなる要因の一つである。

この一年、思いがけずに体験することになった京王線めじろ台への長い通勤時間の連れづれに、この本「韓国の食」が私に更なる食文化への興味を与えてくれた事、そして乗車中が楽しい時間であったことを感謝している。

（健康栄養学科 准教授）

挑戦と経験

学生スタッフ　田　雨
張　偉霞

桜が満開の4月に、私達は吉林華橋外国語学院から東京家政学院大学に編入してきた。初めて故郷を離れ、異国で学ぶことに、先行きが心配になり不安に満ちた。生活を始めると、日中の物価の大きな開きを感じ、少しでも自分の力でやらなければと、両親の負担を減らすということを考え始めた。

大学図書館に入ると、偶然に学生スタッフ募集のポスターを見た。応募したのをきっかけに私達は図書館のスタッフとしての生活が始まった。

仕事を始める前は、ただ図書の貸出返却業務とか図書の配架などの簡単な仕事だと思っていたが、図書館の職員から仕事内容を教えてもらった時、すごくびっくりして不安になった。びっくりしたのは仕事が非常に複雑で、細かいことがいっぱいある。例えば、貸出し業務には、図書、雑誌、ＡＶ資料などの種類があって貸出方法も違っている。それから、館内施設利用の申込、資料の予約、購入希望の受付など初めて経験する仕事である。このとき日本語が堪能ではない私達にとっては、仕事の難しさだけではなかった。図書館の仕事は私達の新しい挑戦であるが、職員が丁寧に教えてくれるのでだんだん慣れてきた。

私たちは学生としても、よく図書館を利用している。ある授業で大江文庫に関して勉強するとき二階のカウンターの職員に頼んで研究資料を探してくれた。友人は論文を書くために他大学図書館の資料が必要になり、図書館に頼んで複写することもできた。図書館の本を読みながらある問題について互いに意見を発表できる学習室もある。読みたい本が貸出し中の場合その本を予約できる。これらは私達にとって新しい体験である。

図書館は情報化され、よく利用者の立場から考えられている。大変便利でもう学生生活に欠かせない部分になった。

（文化情報学科３年）

図書館のミニチュア展示について

野口豊隆

図書館の利用を終えて出口のゲートを通り抜けた時、カウンターの脇に本と一緒にミニチュア模型が飾ってあるのに気が付いている人もいると思います。

展示している物は毎月変わるので、楽しみにしている人も多く、よく携帯電話のカメラで撮影している姿を目にします。

この展示が始まる切っ掛けとなった事は、実は模型とは全然関係の無い出来事からでした。それはある朝の日、図書館で使って欲しいと家で育てた花や野花を、よく持ってきて下さっていた清掃の方が、珍しい物を見つけたからと、大きくて立派なカラス瓜を持ってきてくださった事から始まりました。図書館の中で、今の学生はなかなか目にすることが無いし、見たことがない学生も多いだろうからしばらく飾ってみてはどうかとなり、カラス瓜を置いたのが最初の展示となりました。

最初の頃は、カラス瓜をただ置いていただけなので、学生が図書館から出ていく毎に「これ何ですか？」の質問の連続となってしまったので、いいかげん面倒になり、植物図鑑の説明文を紙に書き出しカラス瓜に添えることにしました。

また、学生が「あった。あった。」とか「これかー」などと言いながら図書館に入ってくる姿を目の当たりにして、学生の口コミ効果を実感したのもこの展示でした。この時は、本以外の目的で図書館に来る学生を見ても、そういう学生もいるんだなという程度の感想でした。

ネコ鍋とコタツ

図書館内展示風景　キティちゃん編

その後、図書館の専門雑誌の特集だったと思いますが、図書館利用者の減少対策として、本と関係の無いイベントの実施や博物館と共催しての展示を行うことによって、図書館に来れば何かしら面白いことをやっているという印象を与え、本を目的としていない利用者を図書館へ呼び込み、本を手に取る機会を増やすという事例の紹介記事を読み、家政学院の図書館でも何かできないかと思案していて思い出したのが、カラス瓜の展示でした。

学生が図書館に足を運ぶ一助になるなら試してみようと、色々と試し始めました。

その中で、反応の良かった物がペーパークラフトとミニチュア模型でした。最初は図書館職員が持ち寄った物を、２ヶ月位の間隔で替えていましたが、数があまり無かったことと種類が揃っていなかったので追加が必要となり、何かないかと探しました。

ちょうどその頃にミニチュア模型が小さなブームとなり始めていて、色々な会社から様々な種類の模型が発売されていました。その中から、展示理由の説明ができるもの、学科に関係づけられる物として、料理、調理器具、家電品や生活雑貨のミニチュア模型に目を付けました。

しかし、売っている物を定価でそのまま買うといくらお金があっても足りないので、処分販売品を当たることにしました。こういった商品は、玩具店以外の販路としてスーパーマーケットやコンビニエンスストアで売るために、アメやガムを１個入れて食品とし、おまけとして模型が付いているという形にしています。

しかしながら、販路を広げることが出来る代わりに、賞味期限が付き販売できる期間が限定されてしまいました。ですから、賞味期限が近づいた商品は、いわゆる投げ売りされるのですが、店頭処分品よりもさらに安く、入手する方法として問屋の処分品があります。通常は一般人では１個２個という単位では購入できませんが、ミニチュア模型のブームのおかげで、コレクターの処分品や重複品販売のフリーマーケットが開催されるようになり、大規模な物には問屋も参加するようになってきていました。ここで処分販売されるものは、定価の1/5～1/10という価格で入手が可能です。こういった場所で１セット300円位のものをいくつか購入したので、月替わりで展示できるようになりました。

また、セット購入することで、統一したテーマの物を全種類入手できたので、展示の際に本にも興味を持ってもらえるように、内容に合わせた本の展示も行うことができるようになりました。

展示の終わった後にミニチュア模型がどうなるのかを良く聞かれますが、季節物の雛人形、五月人形やクリスマス飾り等は使い回し、その他の物は教員からの強い希望があれば差し上げていますので、研究室等に飾られていることでしょう。

図書館内展示風景　イヌ編

また、その中のいくつかは海外へ渡っているようです。ある先生に差し上げた日本料理の模型は、ゼミの学生のショートホームステイの際の受け入れ家族への日本土産として、英訳した解説を付けてプレゼントしたところ、とても喜ばれたそうです。

（事務局総務課係長 前図書館事務部）

本学教員寄贈著書紹介

平成22年に寄贈を受けた本学教員の著作等を紹介します。ご寄贈いただきましてありがとうございました。今後も著作物出版の折にはご寄贈いただければ幸いです。

岩見哲夫
魚（小学館の図鑑 NEO POCKET；3）　小学館 2010

倉田澄子
最新栄養学新訂版　実教出版 2010

須永和宏
生きられる孤独　東京シューレ 2010

高田葉子
ファッション＆ビューティーの色彩　日本色研事業 2009

西海賢二
墓制・墓標研究の再構築　岩田書院 2010
地方史研究ほか　論文多数

松田正巳
「在宅療養」をささえるすべての人へ：わが家がいちばん　健康と良い友だち社 2009
変わりゆく世界と 21 世紀の地域健康づくり　やどかり出版 2010

山縣雅子
染・織・ファイバーアート 91 人が表現する美の世界　ART BOX インターナショナル 2010

吉川晴美
共に育つ―人間探求の児童学―　宣協社 2010